

近大・森本教授の

痛み学

入門講座

33



もりもと・まさひろ 平成元年、大阪医科大学大学院(麻醉科学専攻)修了。同大講師を経て、8年に近畿大学医学部麻醉科講師。22年から現職。医学博士。日本ペインクリニック学会理事。

エキゾチックな香りと鮮やかな黄金色が印象的な「サフラン」(crocus sativus)は、アヤメ科の多年草である。その名前は、アラビア語で黄色を意味する「sahafaran」に由来し、『旧約聖書』にも「芳香を放つハーブ」として記載されている。

ヨーロッパ南部の地中海沿岸で多く栽培されているが、特に「ドン・キホーテ」の舞台になったスペインのラ・マンチャ産のものが上質とされる。わが国では、大分県竹田市産のものが有名である。晩秋に淡い紫色の花を開くが、その雌しべの先端に

ある濃紅色の柱頭を乾燥させても炊き込みご飯の「リエリヤ」は有名だ。収穫期間を必要とし、雌しべに花粉が付かないように手作業で

魔法の薬「サフラン」

パエリヤを食べよう



イラスト 森井真理

摘花される。したがって、極めて高価である。

紀元前から薬草、香料、染料に用いられ、古代ローマ、ギリシャでも女性の眉染めやマニキュアとして使われていたとする記録が残っている。わが国には江戸時代に伝えられ、明治時代には婦人用薬としても販売されていた。サフランの成分は、黄色のカロチノイド配糖体のク

ロシン、苦味や匂いの元であるピククロロシン、芳香精油成分サフラナル、ピククロシンが「発がんプロモーター」(発がんを促すた)も古くから漢方薬の成分として用いられてきた。中国では「藏紅花」(番紅花)と呼ばれ、産後や閉経後の「血の滞り」やいわゆる血の道症(「月経困難症」や「更年期症候群」)、不安、疲労倦怠の特効薬として用いられてきた。不安に

関して、17世紀のフランスの植物学者トゥルヌフォールが、「ある女性がサフランを摂り過ぎてしまい、笑いが止まらなくなった情景を目撃」と記している。本当かどうか疑わしいが、最近の研究報告では、血液を固まりにくくし血管を拡張させることから「心筋梗塞」の再発、「心房細動」、「脳梗塞」での予防

的 な使用が考えられている。また、その成分であるピククロシンが「発がんプロモーター」(発がんを促すた)も古くから漢方薬の成分として用いられてきた。中国では「藏紅花」(番紅花)と呼ばれ、産後や閉経後の「血の滞り」やいわゆる血の道症(「月経困難症」や「更年期症候群」)、不安、疲労倦怠の特効薬として用いられてきた。不安に

第1、3土曜日に掲載します。

授 森本昌宏

地域ニュース